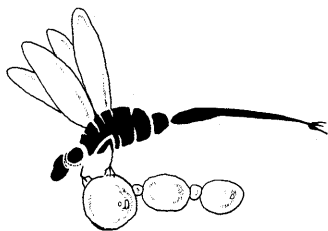


特集〈災害と子ども〉

淡路・阪神大震災

—— 父の場合 ——

前田 陽子



一九九五年一月十七日（火）未明、東京在住の私は小さな揺れを感じて目を覚ましていた。六時過ぎに起き出し、テレビのスイッチを入れる。「淡路島北部に地震」のニュース。両親（父七十歳、母七十歳）の住む明石と淡路島は、民家が見える程目と鼻の先。六時十分、両親宅に電話を入れる。話中。やはり東京に住む弟がいち早く

電話したかしら。とにかく娘を学校へ出さなくては、と、朝食の用意にとりかかる。十分程して再びかける。やはり話中。ニュースは大きな地震と伝えている。淡路島、神戸の情報は流れはじめ、明石の情報は流れない。弟宅にかける。寝ていて、地震のニュースも知らない。という事は……受話器がはずれていて……最悪の事態が脳裏

をかすめる。ニュースが深刻味を増して報道される中、娘を学校に出し、夫を起こす。夫は、これはただ事ではないと、ラジオのスイッチも入れず。私は電話をかけ続ける。七時を過ぎるとつながらなくなる。『阪神地方への電話は非常につながりにくくなっております。緊急の場合以外はおかけにならないように』の案内がくり返される。

救援活動の邪魔をしているのだろうか。でも、これが緊急でなくて何が緊急かの心境。夫はコンピュータでの通信、情報収集も試みる。ニュースは被害状況を伝え始める。が、私達の知りたい明石の情報はない。……「もういいよ。つながらないよ」と、半ば諦めた私の横で、我が家で可能な限りの通信を試みる夫……六時間近くが過ぎ、正午過ぎ。「おとうさん!! よかった、よかった!」夫がかけた電話が通じた。夫の甲高く叫ぶ声。机上には、どんな手段を講じても明石まで辿りつくための資料、メモが散乱し、いつの間にか

身支度まで整えていた。

無事を確認し、すぐにでも迎えにいくという私達を父は断わった。有難いがこれは非常事態である。来るに及ばず。来てはいけないという。母とは地震時の有様を話す。長電話は救援活動の邪魔になるからと切る。余震が怖い。

翌日から毎朝六時半、明石へのモーニングコールが始まった。二人の話を聞き、必要な物を送り、通信不能地域への連絡の仲立ちをする。電気はすぐ復旧したが、ガスと水がなかなかこない。マンションのひび割れが気になるが、マンション会社自体が被害にあっており、連絡不能。行政の対応には、誰も腹をくくって事に当たっていないと激怒。特に父は、戦時中の戦線での経験を引き合いに出し、緊急時の判断と行動に関して感ずる所、大いにある様子。

家の中は滅茶苦茶で、避難所へ行くよう勧めら

れるが、父は、このマンションが倒壊する時は避難所もだめだと、動こうとしない。他人の中では共同生活は、年老いて気ままに暮らしてきた者には敵しいと言う。出入りの電気屋さんが、部屋を片づけ、家具の位置を直してくれたと言う。再三、東京に避難するように勧めると、「まだ大丈夫。このマンションでも、生命の無事を確保できると、男性達は勤め先で必要とされはじめ、老人と女性と子どもが残されている。生活圏での諸問題には、この病気の老体もまだ役立てそうだし、今、東京に行ってしまうと、帰って後、諸問題ととり組む際、わずかでも周囲の気持ちとずれを生じうまくいかなくなると困る。日々の成り行きを肌身で知っておきたい。又、自分の病状をよく知る医者の方に近い」と、言う。

この父、実は四年前に直腸癌の手術をし、その後、パーキンソン氏病、小脳変性症と続いて難病を患い、一時は自分が誰かもわからなくなり、家

庭看護の限界と老人病院に入院。一時帰国した孫に看病され一念発起、リハビリに精を出し、医者も驚く程の回復を見せ、今は自宅療養中の身。神経系統の患いのため娘としてはこのような非常事態の影響、薬の確保などを心配し、強く東京に来る事を勧めるが、頑として首を横に振るばかり。母の話からは入浴、トイレ、洗濯など水の出ない不便、ガスが出ないため献立を考えるのが億劫、体を動かせない父を頼る訳に行かず、十三階からの水汲みの大変さなど、疲れが直に伝わってくる。隣人達の親切を感謝しつつ、気力が失せているのが痛い程わかる。父も時折頭痛を訴えるようになる。いよいよ心身共に休息が必要と思われ、片付けを理由に、私は明石に向かった。夫は何とんでも連れてくるように、地震から三週間、もう頑張らなくていいから、と言う。

明石では、母は疲れていた。私の滞在中、母はずっと眠った。父は元気だった。嬉しそうに私を

迎え、よく話した。この非常時、こんな時に人間は本性がよく見える。若者には感心。このマンションにも流言飛語が飛び交い、その対策に住

人、主に婦人、老人達が集まった際、ヒステリックな雰囲気、機転をきかした父の言が皆の気持ちを平生に戻した。こんな体になってもまだ知恵

と経験で皆の役に立ってる事が嬉しい。聞きとりにくい俺の話を皆よく聞いてくれる。百六十世帯のマンション自治会の相談役になっている。電話で

連絡をとりあい戦友会が動きはじめている。メンバーの安否を確認すると共に体験を共有しようとしている。又、趣味のローンボールの会再建に向

けても中心になって動きはじめている等々。呂律の回らない舌でよく話した。一家を支えた青少年

時代、戦時中と戦後抑留時代、商社マン時代の経験は、この地震後の今に役立っていると。お前とこんな話ができるようになるとは……。俺は三度

死んだ。戦争と、病氣と、地震と。だのにまだ生

かされている。そして、まだ人の役に立ってる自分が嬉しいと何度も繰り返す。

病中の身に生きがいを見つけた父は、ここを動かない。

昔、写真で見た、父の凛々しい入隊時の軍服姿を思い出す。商社マン時代、眠れないと、薬を飲む父を思い出す。自分史を自費出版した直後、病に倒れ、転倒からの護身用ヘルメットを被り、表情乏しく必死に口許で笑おうとした父を思い出す。

今、目の前で相好を崩して笑う父は、ベッドから放り出され、家中が瓦礫の山と化した淡路・阪神大震災を経て、明石の好々爺になった。

(神戸っ子の一人として)